

青山教会会報

「愛のありか」

ヨハネの手紙一 四章七〜十五節

牧師 増田将平

この手紙の差出人と言われてきたヨハネにこのような逸話があります。ヨハネは長生きしました。かつて主イエスと行動を共にした弟子たちが一人また一人と世を去り、とうとうヨハネが最後の直弟子になりました。各地から多くの人々が山を越え、海を越えてヨハネの家を訪れました。ヨハネから直接主イエスの話を聞くためです。晩年のヨハネの答えはいつでも同じこの一言でした。

「神は愛なり」

ヨハネの口からこの言を聞いた人々は、心から満足して家路に着いたそうです。

この手紙でヨハネは「ここに愛がある」と語ります。わたしどもはしばしば神の

愛を見失ってしまうのではないのでしょうか。思いがけない辛いこと、悲しみに打ちひしがれるようなことが起こると「神様の愛はどこにあるのだろうか」「神様はどこにおられるのだろうか」と思うのです。だからこそヨハネは神の愛のありかを指差します。

「神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」

彼はヨハネによる福音書をこのように始めました。「初めに言(ことば)があつた。」「言」とはイエス・キリストのことです。「言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた」これがクリスマスのお出来事です。当時の一部の人々は人間の肉体は悪いものであり精神は尊いものであると考えたために、主イエスは実は肉体はなく、肉体のように見えただけであり、主イエスの体のように見えただけの仮の姿であつたと理解しました。そのような誤つた考えに対してヨハネは記しました。

「イエス・キリストが肉となつて来られたということをお公に言い表す霊は、すべて神から出たものです」(四章二節)

「初めからあつたもの、わたしたちが聞

いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます」

これはこの手紙の冒頭の言葉です。ヨハネは、神の愛は夢や幻ではないこと、「リアルなもの」であることを告げます。

第一主日の礼拝で唱和するニカイア信条は「肉体を取つて人となり」と告白します。聖書が告げる主イエスの救いは幻の世界でなく、まさにこの世界の直中で、わたしどもの肉体によって営まれている日々の生活にもたらされているのです。

ヨハネは九節で語ります。

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました」

どこかで聞き覚えのある言葉ではないでしょうか。ヨハネによる福音書の三章十六節にはこのように記されています。

「神は、その独り子をお与えになったほかに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」

永遠に父なる神と共におられた神の独り子が、神から遣わされて、この世に来てくださった、そのようにして神の愛が

現れ始めたのです。すべては「わたしたちが生きるようになるため」でした。ということとは、それまでは「生きていなかった」のであり、「死んでいた」ということではないでしょうか。「死んでいた」とは何を意味するのでしょうか。「私たちが神を愛したのではなく」と十節にありますから、「死んでいた」とは愛において生きていなかった。愛において死んでいたということだと思います。わたしどもは神を愛していなかった。神を信頼しようとせず、神を愛そうとしないこの世に、神は「独り子」をお遣わしになって独り子を手放された。それがクリスマスです。

「神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」

聖書の言うところの「罪」とは、わたしどもが神を愛していなかったということ、真実に自分を愛すること、人を愛することができない生き方のことなのです。そのようなわたしどもの罪のありかは空想の世界の中ではありません、この肉体において罪を犯し、魂においても罪を犯します。わたしどもの罪もまた、リアルなものなのです。だからこそ、神の御子

が肉体を取って人となられたのです。わたしどもの罪をご自分の全存在によって償うためです。神の御子が死ななくてはならないほどの罪がわたしどもの中にあるのです。そのわたしどもの罪を処理するために、神の御子のいのちが必要でした。神の御子がわたしどもの罪の責任を十字架において取ってください。ここに愛があります。

教会学校の降誕劇では最後に子どもたち全員が先ほどのヨハネ福音書三章の言葉を大きな声で暗唱します。

「神は、その独り子をお与えになったほかに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」

「永遠の命」とはわたしどもが神の愛の中で生かされ、神の愛で自分を愛し、隣人を愛する命です。この神の愛は、わたしどもの努力によるものでも、わたしどもの心の中に自然に生まれるものでもないとヨハネは言い切ります。

「愛は神から出るものです」(七節)

だからこそ、ヨハネはこのように教会の人々に語りかけることができました。

「愛する者たち、互いに愛し合いましたよ」

「皆さんはこれほどまでに神様から愛されています。だから、神様から頂いた愛で互いに愛し合いましょ」と励まします。聖霊なる神の愛の力がわたしどもの心に働くと、誰でもこの言葉のように生きることができるようになるのです。

「いまだかつて神を見たものはいません。私たちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってください、神の愛がわたしたちの内で全うされるのです」(十一節)

神様を肉眼で見た人はいません。しかし、私どもが神の愛によって互いに愛し合う時、わたしどもの愛の背後に神の愛が見えてきます。皆さんもそのような体験をしておられます。わたしにとつては教会学校の先生がそうでした。毎週日曜日の朝にわたしを喜んで迎えてくれる教会学校の先生の笑顔の背後に、神の愛と、神の存在を感じていました。

わたしどもの教会は、この世に神の愛のありかを指し示すために立っているのです。

(十一月十二日主日礼拝説教要旨)